

「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学総合人間学部1年 古川 隆一郎

①留学による変化

今回のプログラムを通して中国語の学習意欲に非常に大きな変化があった。これまでは漠然と中国の文化や人と交流したいという思いでの学習だった。しかし今回のプログラムにおいては、1年間の週2回の授業による習熟のみで現地へ向かうこととなったため、ほとんど意思疎通がとれない困難を幾度も経験し、その結果として中国語習得への思いもより切実なものへと変化した。駅の窓口に並ぶのさえ躊躇するような経験はもうしたくない。英語同様に最低限の意思疎通はこなせる程度まで仕上げて次回に挑もうと思う。

また、中国への印象も明らかに変わった。従来は得体のしれない巨大新興国というイメージで、サブカルチャーでの交流程度でしか親近感を覚えられなかったが、実際にはかなり日本と似通っていた。それどころか一部は創作物に描かれた未来の日本の姿そのものであるようだった。これは都市部を巡ったためであろう。

②海外経験

杭州・上海の観光地をいくらか巡り、山ほどの仏像や庭園など、中国情緒を心身から体得することができた。もっとも事前知識はあまりなかったため、教養があればもっと楽しめるのだろうと感じる場面は多かった。浙江展覧館や上海四行倉庫抗戦記念館では中国特有の歴史観・党史観に触れることができ非常に面白かった。

それ以上に楽しく且つ有意義と感じたのは、中国でのいわゆる「二次元」(日本のアニメ・ゲームオタク的なもの) 境界の探索であった。初週の土曜日にはプログラムで知り合った日本人同士で集まって上海へ向かい、一般的な観光地の他にそうした二次元ショップをめぐり、日本の創作物が中国で展開されているさまや、日本でも有名な中国発の創作物に関する商品の充実ぶりを見るなどした。私はその日だけでは飽きたらなかったため、思い切って翌日単身で再度上海へ向かい、先ほどの四行倉庫に行くなどしつつ二次元境界をもう一度じっくり巡った。さらに帰国前日の土曜日には、後述の学生交流で知り合った浙江大生に杭州の二次元境界の案内を頼んで、上海と遜色ない杭州の二次元ショップの充実ぶりを目にしたり、浙江大の二次元系サークルの活動について教えてもらうなど、より地に足のついた探索ができた。簡体中文版の漫画やライトノベルなどを手に入れ、中国語学習の意欲向上にもつなげることができたためとても満足している。

また、中国の鉄道に乗るというのも貴重な経験であった。

③プログラム内容

平日は3時間ほどの授業があり、週2回ほど午後には浙江省内のテックパークや博物館などに行くアクティビティがあった。二週目の水曜日には本プログラムの目玉ともいえる浙江大学UPAとの交流会があり、英語中国語混じりで楽しく有意義な交流ができた。その他の時間は自由時間となっていて、②で述べたような観光や浙江大生との学外交流などを各自で行った。

④ 進路への影響

今回のプログラムは直接的に私の進路志望へ影響を及ぼしてはいないが、やはり中国の二次元境界との交流を通じて、こういった文化分野で日中の間を渡すような活動に関われればとの思いは増したため、間接的には影響があったかもしれない。